

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成28年8月29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職 名・学 年 博士課程5年

氏 名 原 将 也

助成の種類	平成28年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第15回国際民族生物学会学術大会 15th Congress of the International Society of Ethnobiology		
発表題目	Cassava cultivation and livelihood stability of the Lunda people in northwestern Zambia		
開催場所	ウガンダ共和国・カンパラ・マケレレ大学		
渡航期間	平成28年 7月 28日 ～ 平成28年 8月 11日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ■ 無 □ 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	400,000円	
	使用した助成金額	400,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	交通費	270,000円
		滞在費	76,000円
		査証取得費	14,000円
		発表資料作成費	12,000円
大会参加登録料		28,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 交付の手続き、助成金の振込等、採用決定後からの迅速なご対応ありがとうございました。貴財団が実施する本助成は、わたしたちのような資金の少ない大学院生にとって、非常にありがたいものです。今後とも同様の助成制度が継続されることを強く望んでいます。今回は貴助成によって本学術大会に参加できて、大変有意義でした。ありがとうございました。		

平成28年度京都大学教育研究振興財団
国際研究集会発表助成・若手 成果の概要

アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻
博士課程5年
原 将也

【学会の概要】

国際民族生物学会（The International Society of Ethnobiology）は、ひろく人類と自然の関係を追求する研究者や実務者たちの交流や協力を目的として、1988年に発足された。生態学や農学、文化人類学、開発学といった分野の研究者だけではなく、環境保全や文化遺産の保護などに携わる実務者もメンバーとなっている。2年おきに世界各地で開催される学術大会では、研究機関だけでなく、民間企業やNGO 団体などに所属する各分野の専門家が森林保全や植物利用、伝統知識の保護などについて発表している。本学会は、人文社会科学と自然科学の幅広い分野に携わる専門家が集う学会である。

今回の第15回大会は、ウガンダ共和国の首都カンパラにあるマケレレ大学の植物学・分子生物学専攻が主催した。本大会のテーマは、「人類発展のための民族生物知（Ethnobiological Knowledge for human wellbeing and development）」であり、合計で15のオーラルセッションのほかに、基調講演、ポスターセッション、フィルムセッションが設けられた。どのセッションにおいても在来知（Local Knowledge）が議論の中心となっている。本大会がウガンダで開催されたためか、参加者の多くがアフリカ人研究者やサブサハラ・アフリカ諸国でフィールドワークする研究者や実務家であった。

本大会では人類学といった人文社会科学だけでなく、自然科学の研究発表もなされていた。人間と自然の関係について多岐にわたる分野をカバーしている学会であるため、大会参加中には、さまざまな分野の発表を聞くことができ、多くの知見を得ることができた。また専門外の発表を聞くことで新しい着想を得ることもでき、非常に有意義であった。

【発表の概要】

今回わたしは Indigenous Knowledge Systems and Food Security のセッションにおいて、Cassava cultivation and livelihood stability of the Lunda people in northwestern Zambia というタイトルで発表した。本発表ではザンビア北西部におけるルンダという民族のキャッサバ栽培に着目し、彼らが実践するキャッサバの収穫方法から、食料をいかにして確保しているのかを明らかにした。本セッションではわたしのほかに5名が発表した。いずれの発表者もケニア、ウガンダ、南アフリカ、ブルキナファソといったサブサハラ・アフリカにおいてフィールドワークを実施していた。それぞれの発表は、フードセキュリティや土地利用に関する在来知、在来の種子利用、農村の栄養状態とその対処などに関する内容であった。以下は本発表内容の要約である。

本発表では、ザンビア北西部に暮らすルンダのキャッサバ栽培技術を検討したうえで、ルンダの人びとが実践する食料確保の工夫について分析した。焼畑農耕を営むルンダの人びとは降

雨変動といった予測しづらいリスクに対処するために、10 品種以上のキャッサバを 1 筆の畑に植えつけていた。植えつけ後 3 年目と 4 年目にイモを収穫することができる。3 年目には肥大したイモのみを収穫し、すべてのイモが肥大した 4 年目には、株ごと収穫してしまう。発表者は、3 年目の収穫を”partial harvesting”、4 年目の収穫を”full harvesting”と名付けた。

ルンダは 3 年目に partial harvesting を実施し、小さなイモを残して肥大するまで待つことで、株あたりの収量を最大化し、より安定してイモを収穫できるように工夫していた。ひとつの世帯では常時 4 筆のキャッサバ畑を保持しており、安定してキャッサバを収穫するために、毎年キャッサバ畑を開墾していた。多くの人びとは、たとえ小さな面積でもキャッサバを植えつけなければ、継続してキャッサバを収穫することが難しくなるからであると説明する。ルンダはキャッサバの作物特性や自然環境を熟知し、キャッサバを栽培している。そのため彼らは、安定したイモの通年収穫を実現しており、食料不足を回避することができていた。

本発表では、ルンダのキャッサバ収穫方法について世帯の事例から分析することで、各世帯が partial harvesting によって、キャッサバを安定して確保していることを明らかにした。発表後には会場から、ウガンダのキャッサバ栽培との相違について気候や品種などの視点から質問を受けた。また partial harvesting の分析について、土地生産性の向上やルンダの人のキャッサバへの嗜好の観点から多くのコメントを得ることができた。

【謝辞】

貴財団の助成によって、国際民族生物学会学術大会に参加し有意義な知見、コメントを得ることができました。資金の乏しい大学院生にとって、国際学会への参加は容易ではありません。本当にありがとうございました。